

目的　食物にどのようなイメージを持ってるか，文学書を資料として人の深層にある意識を探り，生活の中における食物の文化的意義を考えてみようとした。

方法　資料としては，医師であり科学的知識を持っていると考えられる斉藤茂吉の短歌を用いた。茂吉の歌集17冊の14093首の中から食物を素材としている521首を選び，その中にある食品を10の食品群に分類し，食品と年齢，短歌に詠まれている感情，その時の状況などとの関連を多変量解析の数量化Ⅲ類によって分析し，考察した。

結果　茂吉の短歌に詠まれている食物は，穀類が多く約24%を占め，穀類の中では飯が33%，餅が29%で，餅については特殊な感情を抱いている。餅には喜び・楽しさと悲しさ・寂しさの両面の感情が結び付けられている。また，単に食べるだけの物ではない社会的，文化的意味をもたせていることがみられた。次に多いのは野菜（いもと山菜を含む）で，約16%を占め，豆類，果物とともに恋しさ，懐かしさの感情と結びつけているものの割合が多かった。幼少の頃の思い出，故郷の食べ物と関連させているものが多かった。魚介類を含む歌も16%と多く，感謝の気持ちや敬意の念を述べた短歌にみられ，生きものという意識があることによるものと考えられた。肉類や乳・卵類は，外国の生活を経験した人としては少なく，食品群と感情の分布図では肉類は哀しみに近く位置している。菓子類の数は少ないが楽しみの近くあった。また，菓子類は年齢的にみると25才以下と66才以上の短歌に比較的多くみられた。従って，茂吉は各食品群にある程度固定したイメージを持っており，食品に文化的意味を持たせていたことが推定された。